様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２５９８

研究課題名（和文）17・18世紀フランスにおける文献資料に見るモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容

研究課題名（英文）The Reception of Moliere and Latin Comedy Writers in France in the 17th and 18th Centuries: Studying the Archives

研究代表者
榎本　恵子（Enomoto, Keiko）

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：３０７８２８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　まず17世紀フランス喜劇作家モリエールが、彼の活躍した時代に古典ラテン喜劇作家の後継者としての評価を得ていたことを、ルイ14世との関係性から検証した。特にヴェルサイユ宮殿における祝祭を演出したことに焦点を当て、彼の作品が古来喜劇の定義を実践した社会を映す鏡であること、ルイ14世が絶対君主制を確立する過程において文化政策の面で大きな役割を担っていたことから証明した。
　次に18世紀におけるモリエールの評価を検証するにあたり、文壇において影響が途絶えたとする定説があることが判明した。ところが実は短期間の不人気の時代があっただけで事実に反していたことを明らかにし、検証の余地があることを突き止めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ルイ14世の治世に関わってきたモリエールの評価を、芸術的見地のみならず、史学、政治学的という複数の側面からアプローチを試みたことにより文学研究でありながら、厚みのある研究ができた。また、自明の理として存在する定説が必ずしも事実であるわけではないこと、研究者はそれを鵜のみにするのではなく、検証して事実を次世代に伝えることが専門家、研究者に課せられた使命であることを確信した。

研究成果の概要（英文）：First, we demonstrated that in the 17th century, within the context of his relationship with Louis XIV, Moliere was considered as a successor to the classical Latin comedy writers. Focusing in particular on his staging of the festivities at Versailles, we established that Moliere’s work was a mirror of a society that practised the ancient definition of comedy, and that in terms of cultural policy, it played a major role in the process of establishing the absolute monarchy of King Louis XIV.
Then, in examining Moliere's reputation in the 18th century, we found that there was a prevailing theory that his influence had ceased in the literary world. However, it appears that this is not the case, as there was only a brief period of unpopularity, and that there is room for further verification in this respect.

研究分野：フランス文学

キーワード：17世紀フランス　フランス演劇　モリエール　古典ラテン喜劇　ルイ14世

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

17 世紀三大劇作家の一人モリエールが「古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスの後継者」と評価され、さらに「フランス喜劇の父」の地位を確立した時、その「プラウトゥス的」、「テレンティウス的」というイメージと二人の作品が与えるイメージには乖離があった。ある劇作家への影響、ある作品群への影響などで個別に触れられることはあっても、時代を通じた彼らの影響関係や位置づけを通時的に検証した研究はなかった。いつも二人セットで提示された彼らのイメージは詳らかにされず曖昧で漠然としたイメージのまま受け入れられていた。

申請者は博士論文においてフランス喜劇が確立した 16、17 世紀の「教育機関」、「翻訳論」、「演劇論とその実践」を検証し、当時も今も曖昧なその呼称と評価の内実を明らかにした。しかし観客の視線が含まれていないことが常に気がかりであった。そこで、本研究において、申請者は 17、18 世紀を生きた人々の文献資料からモリエール、古典ラテン喜劇作家の名前がもたらすイメージと作品に対する批評、社会・政治に及ぼした影響を検証することが、博士論文を補完することになると考えた。

２．研究の目的

本研究の研究課題「17、18 世紀フランスにおける文献資料にみるモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容」は次の二つの側面からのアプローチによりフランス 17 世紀の文化、社会、政治を含む歴史的事実（文献資料）を考究していくことにある。

（１）モリエールの喜劇は先駆者プラウトゥスとテレンティウスの劇作法に倣い、「日常生活の模倣であり、風俗の鏡（キケロ）」を描き出したものである。モリエールによる喜劇の定義の実践を 17 世紀フランス社会、ルイ 14 世の絶対君主制確立における政治的側面の文献資料から検証、考察する。

（２）モリエールの死後、モリエールの作品がどのように評価され、影響を与えていたか、通称モリエールの家と呼ばれるコメディ・フランセーズ設立当初の 17 世紀末から 18 世紀に焦点を当てて検証し、現在まで続く曖昧な「イメージ」の本質を探る。

３．研究の方法

（１）<u>ルイ 14 世治下のモリエールの評価の考究</u>

モリエールの劇団は「国王の劇団」の称号を与えられ、ルイ 14 世の依頼で芝居を作ることが多かった。また、建設途中のヴェルサイユ宮殿における祝祭 1664 年、1668 年の演出を任された。国王の対外政策の一つ「国王のイメージ戦略」もこの祝祭の目的であった。そこで、ヴェルサイユの祝祭におけるモリエールの活躍に焦点をあてて研究をする。当時の資料としてはラ・グランジュによるモリエール劇団の『帳簿』、『ガゼット』、アンドレ・フェリビアン「ヴェルサイユ宮殿における祝祭の公式報告書」などの史料、2016 年 11 月 29 日から 2017 年 3 月 16 日まで開催されていた「ヴェルサイユ宮殿の祝祭と愉しみ」のカタログ（ /s la dir. d’Elisabeth Caude, etc., *Fêtes et Divertissements à la cour, Château de Versailles*, Gallimard, 2016)、ルーヴル美術館司書ニコラ・ミロヴァノヴィックの研究（Nicolas Milovanovic, *Du Louvre à Versailles, Lecture des grands décors monarchiques*, Les Belles Lettres, 2004)、ジェラール・サバティエのヴェルサイユ宮殿研究（Gérard Sabatier, *Versailles ou la figure du roi*, Bibliothèque Albin Michel Histoire, 1999)、及びヴェルサイユ宮殿とヴェルサイユ宮殿図書館にて視察・検証する。

（２）<u>モリエール没後の劇作家の評価の検証</u>

モリエール没後の劇作家の評価は、18 世紀から 19 世紀初頭のヴォルテール『ルイ 14 世の世紀』、ルソーの『ダランベールへの手紙』、レッシング『ハンブルク演劇論』スタール夫人『ドイツ論』などから、17、18 世紀の社会、政治、思想、嗜好の変化の検証していく。そして 17、18、19 世紀の演劇に造詣の深い文豪を研究対象としている研究者によるワークショップを開催しモリエールの評価を分析する。

（３）<u>モリエール作品の登場人物の神話研究</u>

中世ヨーロッパの伝説から生まれたモリエールの『ドン・ジュアン』を例にとり、オペラ、小説、詩、映画、21 世紀のコメディ・ミュージカル、ピーター・ハントケ『ドン・フアン（本人が語る)』まで「神話」が時代の中でどのように生き延びてきたのかを分析することで、後世へのモリエールの影響を図るプロトタイプを作る。

４．研究成果

上記三つの研究方法に即して成果を記す。本研究費助成の他、大妻女子大学の戦略的個人研究費の助成による研究も本研究の成果を厚みのあるものにしてくれたことを付記しておく。

（１）ルイ 14 世治下のモリエールの評価の考究

1643 年の王位継承から 1715 年の死までフランス史上最も長い治世の中でルイ 14 世は対外的な行動力と内政においてヨーロッパの頂点を極めた。絶対君主制確立において国王のイメージ戦略とも言えるヴェルサイユ宮殿建立と祝祭は大きな意味を持つ。ルイ 14 世の要望に応えたのがモリエールだった。彼の古典喜劇作家から継承した理想の喜劇は、社会の悪を暴き批判し、また宮廷の娯楽として見る者を楽しませた。そしてヴェルサイユの祝祭の報告書がモリエールの評価であり称賛であることを再確認することに成功した。

1664 年のヴェルサイユ宮殿出の祝祭「魔法の島の歓楽」で上演した『タルチュフ』とその後の作品 『ドン・ジュアン』についての論文（『コミュニケーション文化論集』第 16 号、2018、pp.61-80）でモリエールの時代悪批判への挑戦を、1668 年 2 回目の祝祭「国王の大いなる喜び」で舞踏の好きなルイ 14 世と宮廷に娯楽と社会批判を込めた散文喜劇と韻文田園劇の融合『ジョルジュ・ダンダン』を上演した意味と影響を浮き彫りにした論文（ウェブサイト「プレテクスト：ジャン＝ジャック・ルソー」、『コミュニケーション文化論集』第 17 号、2019、pp.15-39）を執筆した。そしてヴェルサイユ宮殿での祝祭がもたらすルイ 14 世のイメージ戦略とモリエールの立ち位置（オンライン・ジャーナル『人間生活文化研究』No.30、2020、pp.385-387、pp.389-391）を総合的に俯瞰した。

（２）モリエール没後の劇作家の評価の検証

コメディ・フランセーズが設立した 17 世紀末から 18 世紀に焦点を当て、現在なお国民的作家と称されるモリエールの評価を検証しようとしたとき、コメディ・フランセーズにおいてモリエールの上演が 18 世紀のある時期途絶え、さらに 19 世紀の文豪は 17 世紀フランス古典演劇の影響下から外れた、という定説が 18、19 世紀の研究者に許容されていることが明らかになった。これは本研究の意義を覆す定説であった。

そこでその定説の事実関係を探るべく 17、18、19 世紀の専門家を集い、ワークショップを開催した。その結果定説とは裏腹に 18、19 世紀の文豪はモリエールを意識し、また評価していたことが明らかになった。確かに 18、19 世紀の専門家にとって、17 世紀の劇作家の評価は、定説があればそれ以上詮索せず受容するだろう。17 世紀の専門家であり、モリエールの 17 世紀と、21 世紀現在の評価を知るからこそ問題提起となり得るのだということを実感する結果となった。そして定説と事実の齟齬を明らかにすることがモリエールの専門家に課せられた使命であると確信した。

2019 年 9 月 28 日、大妻女子大学において開催したワークショップ「モリエールを考える」の内容は以下の通りである。

11:00　プロローグ（開会の辞）
11:15-13:00　第一幕　17 世紀におけるモリエール
　「ルイ・ド・フュネス主演映画『守銭奴』について」（青山大学　秋山伸子）
　「ラシーヌとモリエール」（京都大学　永盛克也）
　ディスカッション
　昼食
14:00-16:00　第二幕　18、19 世紀におけるモリエール
　「18 世紀フランス演劇における「オリエント」再考」（立教大学　桑瀬章二郎）
　「モリエールとレッシング」（大妻女子大学　榎本恵子〔申請者〕）
　「バルザックとモリエール」（上智大学　澤田肇）
　ディスカッション
　休憩
16:30-18:00　第 3 幕　舞台上のモリエール
　「モリエールと 17 世紀の舞台」（長崎外国語大学　冨田高嗣）
　「『ドン・ジュアン』と『ドン・ジョヴァンニ』（オペラ演出家　伊香修吾）
　ディスカッション
18:10　エピローグ（閉会の辞）

（３）モリエール作品の登場人物の神話研究

モリエールが 18 世紀以降も現在に至るまでその存在が大きいことは、コメディ・フランセーズの上演リスト及び上演作品の作家リスト（Sylvie Chevalley, *La Comédie-Française hier et aujourd'hui*, Didier, 1979）を見れば一目瞭然なのだが、それでもモリエールの受容が途絶えたという定説が受け入れられていたことも事実であった。モリエールの影響力を図るために、作品や主題、登場人物の普遍性を証明することは、劇作家の評価を再認識することとなる。そこで 21 世紀まで小説、映画、ミュージカルの新作が生まれ続けるドン・ジュアン伝説を例にとり、各時代の文豪への影響と読者等受け手の受容を検証した。そしてドン・ジュアンが各時代、各作家によって変化あるいは進化しつつも「存在」し続けていることを考究した（「ドン・ジュアンあるいは神話となった男の運命」『コミュニケーション文化論集』第 19 号、2021、pp.1-11）。これはモリエールの作品が国境を越えて翻訳され、あるいは上演されていることにも表れている

ことを証明した（例えば「日本におけるモリエールの受容」、同論集、第 20 号、2022、pp.1-25）。また毎年コメディ・フランセーズでモリエールへのオマージュが開催されたり、時代や演出家の嗜好によって次々に進化する演出を可能にする普遍性を持っていることを明らかにした（「モリエール年のコメディ・フランセーズ」、同論集、第 21 号、2023、pp.1-20）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 榎本恵子	４．巻 第21号
２．論文標題 「モリエール年のコメディ・フランセーズ」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榎本恵子	４．巻 第20号
２．論文標題 「日本におけるモリエールの受容」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榎本恵子	４．巻 第19号
２．論文標題 「ドン・ジュアンあるいは神話となった男の運命」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榎本恵子	４．巻 第18号
２．論文標題 「モリエールのドラマツルギー～Defi　挑戦<3>～『町人貴族』あるいはコメディ・バレエという幻想」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 -
2．論文標題 「音楽とバレエ付き喜劇『ジョルジュ・ダンダン』の本当の魅力―散文喜劇と韻文田園劇の融合―」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Pretexte : Jean-Jacques Rousseau (http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org)	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 第17号
2．論文標題 「モリエールのドラマツルギー～Defi 挑戦<2>～『ジョルジュ・ダンダン』あるいはヴェルサイユの一夜の幻想」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	6．最初と最後の頁 15-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 第16号
2．論文標題 「モリエールのドラマツルギー～Defi f挑戦～『タルチュフ』と『ドン・ジュアン』」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『コミュニケーション文化論集』	6．最初と最後の頁 61-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 第514-15号
2．論文標題 「ヘラクレスに象徴されるルイ14世」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『人文学報』	6．最初と最後の頁 309-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 No. 28
2．論文標題 「17世紀フランス王太子の教育にみる古典ラテン喜劇作家の位置づけ」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『人間生活文化研究電子ジャーナル』	6．最初と最後の頁 435-438
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 No. 30
2．論文標題 「国王のイメージ戦略(1)－ルイ14世とヘラクレス－」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『人間生活文化研究電子ジャーナル』	6．最初と最後の頁 385-387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 榎本恵子	4．巻 No. 30
2．論文標題 「国王のイメージ戦略(2)－ルイ14世と三つのヴェルサイユの祝祭－」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『人間生活文化研究電子ジャーナル』	6．最初と最後の頁 389-391
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関